

新潟中央短期大学

暁星論叢

第58号 抜刷

(平成20年6月)

地域をつなぐ子どもとアートの可能性

「新通プロジェクトー幼児期との対話ー」を通して見えてくること

村木 薫

地域をつなぐ子どもとアートの可能性

「新通プロジェクト—幼児期との対話—」を通して見えてくること

村木 薫

はじめに

2006年11月、新潟大学教育人間科学部（現・教育学部）の丹治先生から「アートクロッシング2007にいがた」という芸術の新たな可能性の模索と地域の活性化を図ることを目的としたアートプロジェクトへの参加を呼びかけられた。この取組は新潟大学周辺の新潟市内野町を中心とし、寺尾中央公園にわたるもので、過去3回は「うちのDEアート」というかたちで内野地区限定で行なってきたものを新潟市の政令指定都市化による地域拡大の影響を受け、今回のアートプロジェクトより新潟市西区というエリアに拡大することによって、私及び新潟中央短期大学の参加を促し、決定するものとなったと思われる。その背景として、2005年より内野町近郊の新通地域にある新通保育園において村木ゼミの学生と保育園におけるビオトープの制作および保育実践を卒業研究のテーマとして継続研究してきている経緯があったからである。

ビオトープとアートの関係に関してはここで詳しく述べることは省きたいと思う。この保育園で3年間お世話になりながら、手探りでやってきた研究ではあるが、それが、今回のプロジェクトの拠点となることは偶然ではないようだ。最近の子どもたちを取り巻く環境を考えると、大人の論理・考え方ですべて理解しようとする見方がはびこり、そのことが社会の様々な摩擦を生み出しているように思える。保育園においてビオトープを造り、野外保育を考えることは、どこかでこの地域とのつながりも必然的に生み出していた。今回は、新通地区において、子どもの目線に立ったものの見え方あるいは想像力の中から生まれてくるものの可能性をアートという手法で提示しようと思った。その実践記録を綿密に紹介し、それらを通して見えてくることからさまざまな問題を考えたい。

制作過程（2007年6月～12月までの記録及び考察）

6月16日（土）

新通保育園において今回の私のプロジェクトに協力してくれる新潟大学教育人間科学部3年生の小出美慧さん、2年生の風間美土里さんたちと顔合わせを行なう。そして、私の

書いた企画書及び今後のプロジェクトの進め方について協議する。

7月1日(日)

このプロジェクトを始めるに当たって、最初に新通保育園の母体である護念寺の檀家の人たちに声を掛け、私たちのプロジェクトの理解を求めるところから出発する。そこで、保育園の理事でもあり、地域の活動に協力的な相川さんのところへ挨拶に伺う。最初に、私のプロジェクトの主旨について話したところ、気持ちよく賛同していただく。その時、第2次世界大戦後、新通の集落で戦死した人を弔つてろうそくの明かりが点々と道沿いにつながっていた風景の話が出た。亡くなった人の家と慰靈祭を行なった集会所までの道のりに大根の輪切りを台座にして和紙を巻いたらうそくの明かりが点々とつながり、その生と死を強く印象づける光景を子供心に深く刻み込んでいるという。

実は、この話題が出る前に、私のはうで地域の子どもと大人が作った白いオブジェを道沿いに並べていくという提案に対して相川さんたちが思い出し、語ってくれたことに深い興味を持った。私がやろうとしていることも簡単に言うと、あるものがある場所からある場所まで並べてラインを創ることである。その風景が変わることが目的ではなく、その空間の質が変わることが目的である。先ほどの風景では、亡くなった人を悼み弔う気持ちがろうそくの明かりを通して地域の人たちにストレートに伝わってくる。また、子どもとしてその風景に接した時、もしかしたら、ただ単にろうそくの炎に点々と照らされた道を美しいと強く感じたのではないかと想像できる。今回のプロジェクトは、その非日常の空間が生み出す異化作用、もう少し言い方を変えるならば目に見えない思いや願い、祈りのようなものが大袈裟なかたちではなく日常生活の中で身近にある素材で作られること。そして、だれにでも共通に「どこか心に引っかかる」という思いにつながることを大切にしたい。なぜなら、素晴らしいとか感動するということは、芸術という概念でわかるということではなく必ず何か心に引っかかるという体験が存在して成立するものだからである。そして、そのような体験は幼児期あるいは初等教育段階において、ぜひ体験しておいてほしいことであると思った。

7月8日(日)

護念寺の細川好円住職と新潟大学の風間さん、小出さんと実際にオブジェを並べる道を歩く。歩く道すがら畑を耕している農家の人们との何げない挨拶の中で、細川好円住職の地域の人たちとの信頼関係を強く感じる。神社もお寺も関係ない共存関係を地域の中で強く意識し、つとめて地域の人の心のよりどころである神明宮という神社の整備に協力してきたことなど、現代の宗教不毛といわれる世の中で生きる宗教者の一端を垣間見る思いであった。実は、最初に私が神社と保育園をつなぐというコンセプトを話したときに、仏教側に立つ寺院の住職としてどのように思われるか少し危惧していたが、すぐにその意図を理解され、それ以上に、心強い後押しをしていただく。

7月16日(日)

護念寺にて打ち合わせ。今後の方針を話し合う。ここで、新通自治会会长の槙口さん、ウイズプラザ新通自治会会长の船岡さん、そして、西区親子劇場の五十嵐さんたちと知り合う。掲示板の必要性、キャッチコピーの内容、8月22日(水)に新通集落開発センターで自治会役員の人達の会合があるのでそこに出席することを伝えるなど、少しづつ新通地域の人たちと触れ合う機会が広がるのを感じる。

8月8日(水)

護念寺にて打ち合わせ。ワークショップの日程、内容等を打ち合わせる。その後神明宮の久我宮司さん宅へあいさつに伺う。

8月22日(水)

護念寺にて打ち合わせ後、新通集落開発センターにて新通自治会の会議が開かれ、そこへ挨拶に伺う。槙口自治会会长ほか、副会長の岡さん、今泉さんと挨拶を交わす。ここでの関係者はほとんどこの内容を知っており、自治会組織がきちんと機能している集落の優れた組織力を感じた。かつてはこのような村落共同体がそれぞれの地域にあり、お互いが助け合う組織があった。しかし、現在は家族が一世代家族となり、祖父母との関係や世代を超えた伝承文化が伝えられにくい構造になっている。その後、昨年宅地分譲を行ったプラット新通という新しく生まれた自治会の大橋自治会会长さんのところへ挨拶に伺う。新しくこの地域に住むことになった若い世代の住民に参加して欲しいことを伝えようとしたが、現段階としては、様々な見方をする人達がいるので、この自治会が全体としてこのプロジェクトに協力・参加するのはむずかしいとの意見を伺う。旧集落を中心とした新通自治会と新しく土地区画整備によって生まれたプラット新通という自治会とがうまく連携が取れずにいる状況を感じた。このような状況だからこそ、世代や地域を越えた、もしくはつなぐ試みが意味を持つのではないかだろうか。アートの役割をここでのプロジェクトを通じて考え続けたい。

8月25日(土)

護念寺境内にて、新通地域の子どもから大人まで作ることの出来るオブジェの形を考える。ここでは言葉として一人歩きをした「自然界の精霊」というテーマで、新潟大学の風間さん、小出さんと三人で自由に試作を行なってみる。自然界の精霊という形のきっかけをつくる上で、ひとつ目の例として「もののけ姫」¹に出てくる「こだま」のイメージからかたちを作り、そこからまた、それぞれ各自でイメージを膨らませて創ってみる。しかし、映画に出てくる「こだま」の映像イメージが強すぎて、なかなかオリジナルな形にまで到達しない。想像できるものなら何でもいいとしても、ある程度のルールを伝えなければいけないのではないかと考える。粘土で形を作るが、わかりやすく子どもたちに伝えるにはどうすればいいのかなどを話し合いながら、団子を二つ作り、それを接着させて頭と胴体

に見立てる。顔の表情を大きく特徴付けるため、目や口を大きくえぐったり、付け加えたりする。それを屋外の地面で固定させるために篠竹や割り箸を使って支柱にする。（写真1）また、粘土状で屋外に設置した場合は、雨にぬれると溶けるので、外形の凹凸や表情を残すように注意をしながら石膏のどぶ付けを行なう。表面を白くコーティングすることで無垢なイメージにもつながるのではないかという期待もある。そんなことを考えながら、10体ほどの試作を行なう。また、竹の灯籠も設置する予定で、斜めにカットした竹のまわりに和紙を貼り、ろうそくを入れて明かりの状態を調べる。

8月31日(金)

神明宮の久我宮司さんの竹林で篠竹を切る。やぶ蚊にさされながらも支柱となる篠竹を100本ほど確保した。また、先週行なった試作の結果を見たが、粘土の乾燥による収縮が起こって、石膏表面との剥離が生じ、軽く押しただけで、ぼろぼろと石膏がはがれてしまった。この結果、粘土で成形した後、1～2日乾燥させてから石膏のコーティングを行なうことが検討された。このプロジェクトが成功とか不成功はいったいどこで判断できるか？たくさんの人たちの協力がなければ成立しない試みであり、まだまだ未知数の部分で進行している。そのプロセスにおける様々な経験がこのプロジェクトに関わった人たちの中に何かやりがいとして残ってくれたらいいと思う。

9月2日(日)

夕方6時より神明宮境内において地域の盆踊りに参加。夕方5時に護念寺に集合し破損したオブジェの補修を行い、盆踊りのときに配るチラシやポスターを準備する。新潟中央短大から2人の学生が合流し、合計4人の学生と神明宮の久我宮司さんのお宅へ挨拶に伺う。祭りが始まる前に、先日お会いした地域の自治会の人たちと一緒に拝殿に上がり、祝詞を聞き、お祓いを受ける。厳粛な気持ちとなる。太鼓の音とお囃子が聞こえ、境内には夜店が並び、新潟甚句、長岡造形大学の和太鼓グループの演奏、そして、最後に地域で古くから踊られている盆踊りへと進む。その間、我々は小学生や幼児を連れた親子連れを対象に声を掛けながら、9月15日(土)のワークショップのチラシを配る。いきなり声を掛けられ少し驚く親子もあったが、趣旨を説明して数組の人達は笑顔で励ましてくれる風景も見受けられた。しかし、それ以上に気になったのは地域の人たちが一番踊りやすく大切にしてきた昔から踊ってきた盆踊りに愛着を持っているのか疑問を感じたことである。現代の若者が踊らなくなったからといって失くしていくいいものなのか。生活の中から必要でなくなったものでも、心のよりどころまで失くしていくいいものなのか。町おこしを考え

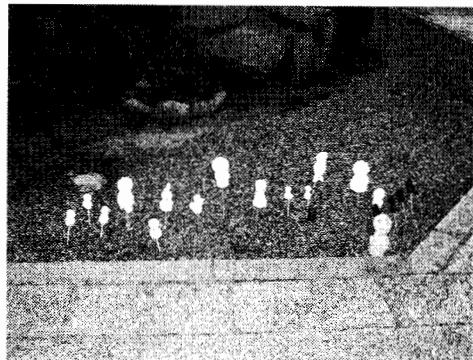


写真1 「自然界の精霊」の試作

ていく上において、日本中の大きな課題でもある。この地域に住む一人一人がどこかの部分で役に立っていると自覚したときに、みんなが喜び、地域が元気になる。特に年寄りの力、知恵を活用してもらうことは欠かせないことである。古くから伝えられてきた価値観をここ何年間かの変化で失くしていいものなのか。再考の時期にあると感ずる。

9月9日（日）

第1回新通プロジェクトのワークショップの最終打ち合わせを行う。

ここで何故、土という素材を使うのか考えてみたい。「土はまず人が耕し、生活の糧を得る重要な場である。また、「人は土から生まれて土に帰る」という言葉に見られるように、生命の根源は常に土にあり、生の帰結である死もまた土の中にある。人類の生活史の中での役割分担からいうと、大体男は外に出ていて狩猟・採取し、農業は女性の仕事であった。女性が土を耕したのであった。土は絶えず女性的な役割を担わされていた。また、土は人間に必要なものを生み出すところであり、その生むという母性の観念が土、大地と強くつながってくる。」²⁾ この文章の中にある生命の根源や死もまた土の中にあるという部分からも想像できるように、素材である「土」それ自体がじつは命という観念を象徴している。このプロジェクトにおける素材選択の一番の理由でもある。また、それと並行してこの「こだま」の発想は生まれた。17年前大学院修了制作として「木魂—風への予感—」(写真2)という作品を創った。木の枝と木の根っこで骨組みを作り、土と糞を混ぜた土壁の材料で、大地から生まれ、そして人間のかたちになって、またいつか風の中に消えていくというあらゆる生命の循環をイメージした作品として提出したものである。この作品のタイトルに木魂(こだま)というネーミングを行なったが、もしかしたら土魂(つちだま)でもよかったのかもしれないと思ふ。おそらく、広辞苑でタイトルを探したときに木魂という名詞に出会い、その音の響きに納得して決定した記憶がある。

土は地球上の表面を覆っている素材であり、子どものときは必ず、触って、にぎって、崩してというように、一番身近に手で触れることのできる材料である。そこに水（雨水など）を加えたりすることで粘性の強いものは粘土として成形ができる。また、泥んこ遊びのように手や顔に塗ることのできる材料にもなる。また、土は植物、動物を問わず、あらゆる生命を育む土台であり、基盤でもある。そこを通して根を張り、太陽に向かって成長することができ、秋になって種が落ちれば、そこを寝床として春に芽吹くまで守ってくれるカプセルでもある。そのようにあらゆる生命の源となっている土をもう一度手にとっ



写真2 「木魂—風への予感—」(1991)

て感触を楽しみながら自然と生まれる形、あるいはイメージできる形を思いつきり自由に創つてみることも可能である。おそらく、そこには大人も子どももない無心になれる条件が備わっているのではないだろうか。

9月10日(月)

新通地区にある田んぼの一部に建物を建てるため、ボーリング調査を行なっている場所に行き、現場監督の上田さん（株式会社廣瀬 土木事業部工事部係長）と打ち合わせを行なう。相川さんの紹介でスムーズに話し合うことができた。田面より地下13メートルの土で、田んぼの下は不透水層となっており、粘性が強い地盤である。（写真3）こげ茶色の地質で、若干硬い塊や石も混ざっているが、材料として使用することに問題はない。さらにその中に細かく切った藁すさを混入することで「つなぎ」の役割を入れ、壁土の要領で使ってみたい。日本の住宅の在来工法として昔から伝えられてきた技法でもある。9月14日(金)に1トンの土を保育園脇の空き地に運んでもらうようにお願いする。これでこのプロジェクトに使用する材料が地元から入手できることになり、地産地消ではないが、本当の意味で、地元の協力を得て「新通プロジェクト」と呼べるイベントとなることの意味は大きい。

9月15日(土)

第1回新通プロジェクトワークショップ

午前9時より、新通保育園において最初の「こだま」作りを行なう。新潟大学から4人の学生たちと中央短大から3人の学生たちが参加してくれる。子育て支援センター前の広場でブルーシートを敷き、土を左官用に使うふねに入れ水を加えながらスコップなどで捏ねていく。途中で細かく切った藁すさを混ぜながら自由な形に成形できる具合のいい状態にする。（写真4）最初に、保育園の園児たちが来て恐る恐る土に触るという状態であった。我々の方から「精霊」などとう言葉は使わず、土に触ってみようとかお団子を二つ作ってくっつけてそこに目や口をつけてみようとか、気持ちのいいものを作



写真3 土の採取地（新通地区的田んぼ）



写真4 土と藁すさを混ぜる



写真5 第1回ワークショップ風景

ってごらん。などの声掛けに対してもすぐに納得をして制作に入るという姿はほとんどなかった。そこで、普段の日常会話をしないながら、子どもの気持ちを説きほぐしていくという時間が必要であることがわかった。（写真5）そこで、中央短大の学生は子どもたちの要求に合わせて水をたくさん入れて泥んこ状態を作り、成形する以前に触覚から開放して遊ばせるというやり方を行なっていた。（写真6）そこで初めて子どもたちの楽しそうに腕や顔に泥をつけてはしゃぐ姿が見られた。3歳から5歳までの園児たちの発達段階の違いもあり、我々の意図する「たくさんの形にしてほしい」という思惑は見事に外れてしまう場面もあったが、それはそれで第一段階としては当たり前の光景だったのではないだろうか。それでもこの作業に興味のある子どもたちはおもしろい形を生み出していた。子どもたちとのやり取りの中から次第に自分の好きな形というふうに言葉を変えていった。ここで自由な形にしたのはまずこの作業に対して違和感を感じないで参加してほしいとの考え方からである。ただ、キャラクター的なものになりかけた時は、もう一度言葉を掛けて、自分にとって優しい気持ちはどんな形なのかなどと問いかけるようにしていった。（写真7）このワークショップが始まるまで、学生たちは私のねらいやテーマは説明したが、どのような言葉掛けをするのかという説明は行なわなかった。私自身もここで要求することは画一的な「こだま」ができることではなく、逆に様々な「こだま」が生まれてくることが自然であり、そうではないと、一人ひとりが参加したという意識が生まれないのではないかと考えたからである。しかし、ここで「こだま」自身がキャラクターではないかという議論が生まれる。その答えとして、私はこのように考えたい。「こだま」が持っているキャラクター性というのは決して固定的なイメージを与える性格のものではなく、自分の自由なイメージを付け加えることのできる性格のものである。もっといえば全くそのイメージから外れていても「こだま」という性格のものになりうるのではないだろうか。そこに流れているイメージは、生命の根源的な形であるアメーバ的なものといつてもいいものであり、自由自在に形を変える素材として土が考えられるように、不定形でもきちんと存在することのできる精霊という性格そのものである。「アニミズムと呼ばれている宗教がある。この耳慣れない言葉を理解するには、



写真6 水を大量に入れ泥んこ状態を楽しむ



写真7 様々な言葉掛けを行なう

日本古代の神々について述べた『古事記』の文章が参考になる。つまり、その当時は「草や木がそれぞれに言葉をしゃべり、国土のそこここで岩や、石や、木や、草の葉がたがいに語りあい、夜は鬼火のようなあやしい火が燃え、昼は群がる昆虫の羽音のように、いたるところでにぎやかな声がした」というのである。人間生活をとりまくすべて、生物も無生物も、それぞれに魂をもち、言葉を交わしていたというのである。こういう自然と神のとらえ方、それを一般にアニミズム、つまり精霊信仰と呼んでいる。」²⁾の中に書いてあるよう精霊信仰の対象となっていたものは人間だけでなく、動・植物や無生物のすべてがそれ自身の魂を持っているとする信仰である。今回のワークショップでは幅広く自然界における自分が思いつく精霊を創ってみようという言い方が正しいのかもしれない。

「アニミズムの定義は比較民俗学の方向からはできにくい。だから、ここではとりあえず、すべての存在にスピリットが宿っている。それはモノであると同時にカミである。そういうごくおおまかに定義から出発することにしたい。というのは、問題はアニミズムの本質の側にあるのではなく、それをとらえようとするわれわれ研究者の側にも関わっているからである。研究の方向、その目ざすものが問題なのだ。別のいい方をすれば、靈魂、あるいはスピリット、あるいはカミを映す鏡が問題だからである。そもそも、カミを映す鏡、自分という鏡はどういう鏡なのだろうか。それは観察者の持っている鏡だろうか。それとも参与者の持っている鏡だろうか。その鏡に映るのは、モノだろうか、カミだろうか、自分だろうか。」⁴⁾ここで述べられているように、自分という鏡はどういう鏡なのだろうか。という部分はまさにアートの主題となるものであり、自分をこの機会に見つめそこから出てくるイメージの世界を子どもたちなりに自由に表現してほしいと思った。午後から親子連れが4～5組参加してくれた。ここで気づいたことだが、子どもよりも保護者の方が夢中になって作ることに集中していたように思える。当日は天気がよかつたので、土で創った様々な「こだま」を竹や割り箸で刺しそのまま乾燥させておいた。石膏を掛けてコーティングした後のひび割れ防止のため、これから工程の中に少なくとも1日は乾燥させるようにしていきたい。初日のワークショップでは200体ほどの「こだま」を創ることができた。

9月24日(月)

護念寺にて夕方5時より神明宮の久我宮司さんと細川好円住職、新潟大学の風間さんと10月21日(日)のトークセッションの打ち合わせを行なった。当日は他に横口新通自治会長さんも参加する予定である。私の構想としては、今回のプロジェクトを通して関わった様々な分野の人たちと、このアートプロジェクトの反省や意義あるいは将来性などについて話し合うことを一番の目的とした。その切り口として神社の役割、仏教を通じた地域おこし、新通自治会の現状、そしてアートと子どもの果たす役割など、参加者からも意見を伺い、自由に横断的に話し合う中で、新通地域の文化を再認識し、町の発展を意識した新たな活

動の方向性を見出すきっかけにしてもらいたい。

9月29日(土)

第2回新通プロジェクトワークショップ

この日は新通保育園夏祭りで、新潟大学の学生5人と中央短大の学生2人が参加して園庭の一角に会場を借りて行なうことができた。(写真8) たくさんの卒園児たちや、地域の人たちが来てくれて、5回のワークショップの中で最も賑うものとなった。(写真10) 前回と同じように興味を示してくれた人たちに声を掛けながらの作業となる。もう少しちゃんと人が興味を示してくれるのかなと期待したが、やはり目当てはお祭りの縁日であり、食べ物やゲームにはたくさん的人が集まっていた。見た目の楽しさや面白さに欠ける傾向は否めず、土とか泥を目の前に見せられても何か変わったことをやっているなと思われていたのかもしれない。それでも地域に配ったチラシや広報などの効果があり、声をかけて参加する親子連れも数多くいた。この日は並行して前回創った「こだま」の石膏付けを行い、芝生の上に白い「こだま」の並んだ風景を見てもらうことができた。(写真9) たくさん小さな白いオブジェが1kmの一本の線上に並んだときに、日常の風景の質がどのように変化するのか。これらを一本の道として並べることの意味を改めて考えたい。「ドイツの哲学者ゲオルグ・ジンメル（1858～1918年）は

書いている。二つの場所のあいだに道を作った人びとは、もっとも偉大な人間的事業のひとつをなしとげたことになる。無論彼らは二つの場所の間を頻繁に往復し、そうすることによって両地点は主観的に結合していたはずである。しかしながら彼らが地面に道のかたちをくっきりと刻みつけることによって、はじめてここに両地点は客觀的に結合され、結合への意志は事物の形態をとるにいたった。一道づくりは人間固有の作業の一つである。ジンメルの言いたいことは、動物はその行動軌跡に始点と終点を明確に意識していないが、人間はその意味を知っており、道を造ることによってその意志を形に表わして実現してい



写真8 第2回ワークショップ風景



写真9 白い「こだま」ができるところ



写真10 小学生も積極的に参加する

る」ということである。ここでは新通保育園という子育ての象徴的な場所と、神明宮という地域の氏神様で昔から慕われ、春・夏の祭りの場所としてはれの舞台となる神社をつなぐことの意味は何か？ジンメルの言葉を借りれば、二つの両地点は客観的に結合され、結合の意志は見る人に形として伝えられる。(写真11)道として認識できる手段として、「並べる」という行為は、主体である子どもたちが楽しく関わることのできる行為である。2週間という短い期間かもしれないが、何か変わったということが見る人たちに感じてもらえばいい。それがこのプロジェクトの意味もある。並べるという行為で道を作ることに対して地域が、また関わる大人たちが、子育てを支え応援する風景となり、新旧の地域の人たちをつなぐ風景になってほしい。経済や効率の優先する生活空間に普段は現れない「心の道」(久我宮司さんの言葉)が現れる事を期待したい。

10月6日(土)

第3回新通プロジェクトワークショップ

朝9時より新潟大学の学生5人、そして、はじめてボランティアとして内野町の勝見さんが加わってくれた。この日は土曜日に登園する園児たちとチラシや広報誌などを見て来てくれた数組の家族とで制作した。新潟大学でも彫塑を専攻している学生を中心となって積極的に制作し、200体ほど創ることができた。また、ここに参加してくれた親子の制作の違いを見ていると、親のほうがひとりで熱中し、子どもが不思議そうにその手付きを見て、話しかけるという風景に出会った。大人にとって土という素材が懐かしいのか、造るという純粋な行為が嬉しいのかともかくその表情は真剣そのものであった。(写真12)「人間のもついわゆる<人間性>は、ほとんど文化によって形成されてしまっており、したがって、人間は文化から隔離されれば完全

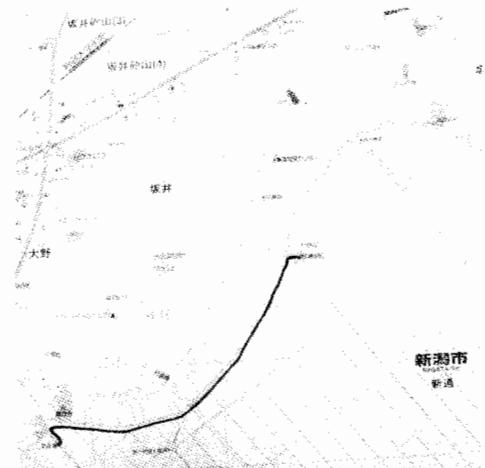


写真11 新通保育園より神明宮までの道程



写真12 親と子の制作風景



写真13 第3回ワークショップ制作作品

に非人間化すると同時に、逆にどんなに＜未開な＞子どもでも、それどころか石器時代人ですらも、文明社会のなかで育てられれば完全に＜文明＞化され得るのである。文化的存在としての人間のこうしたおどろくべき可塑性は、動物学者たちのあいだでよく知られている neotenie（幼態成熟）現象とふかくむすびついているはずであって、それゆえ、人間の文化的存在性とその発育のおそさ、永遠の未完成とは、不可分なのだ。（写真13）人間は類人猿よりもむしろその幼児または胎児に似ており、現在の類人猿よりはむしろその祖先に似ているようで、他の動物がその幼少期にのみもつあの遊びの習性や旺盛な好奇心を、人間だけは習性たもちづける。⁶ ように文化的存在としての人間のこうしたおどろくべき可塑性、永遠の未完成という特質が文化を支えてきたのであり、だからこそ文明化して様々な便利なものを生み出してきたのだろう。しかし、土という素材を前にした時に、人間は動物としての遊びの習性や旺盛な好奇心を呼び覚まされ、また、手を使って土を捏ねているうちに生活のために働かせていた脳が、新鮮でピュアな状態にもどるとは考えられないだろうか。手や指先は第二の脳といわれるよう触覚を通じてお互いに連動し合い、土との関わり方は深まったものと考えられる。最初、このプロジェクトは子どもが主体と位置付けていたにもかかわらず、一緒についてきた大人の方が子どもよりも積極的に関わってくれた。自分を見つめ、原風景や原初的な遊びを思い起こしてくれるきっかけになつたのではないだろうか。大人のための幼児期の追体験を援助し、そこに大人と子どもが一緒にになって会話するという意外な効果を生み出していたと考えることができる。

10月7日(日)

第4回新通プロジェクトワークショップ

この日は、新潟大学の学生が5人参加してくれる。日曜日なので地域の親子連れが数組訪れ制作を行なう。今回の反省点として広報活動があげられる。新通地区を対象のエリアとしたものの、大切な参加者として位置付けなければいけない新通小学校に事前のきちんとした広報ができなかったことである。私ももっと早くどのような範囲にチラシを何枚配ればいいのかを把握すればよかったと反省している。また、最初の計画ではワークショップをすべて新通保育園で行なうのではなく、新しく区画整備されている神社に近い町内的一部分に場所を借りて行ないたいと思っていたが、そこに移動するだけの余裕や人員が足りず、新しく引っ越してきた若い世代の地域の中にこのワークショップの会場を移すことはできなかった。午後から竹灯籠を担当してくれる高山の田中さんのお宅を訪問し、裏の竹林や制作途中のものを見て、目標数200本（5メートルに一本の間

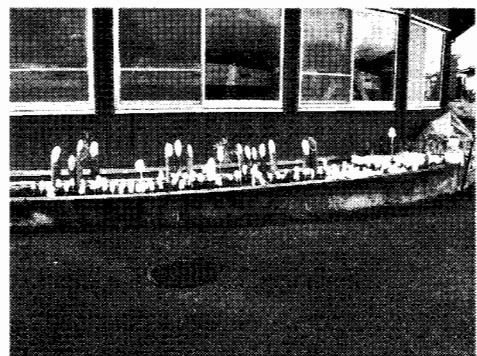


写真14 竹灯籠と「こだま」

隔）でお願いをする。新通地域はもともと農業を生計の基盤として成り立ってきた地域である。農業という生活を支えるための仕事の中には生きるために必要な食料や道具などを知恵と工夫で作ってきた伝統がある。現代の生活感覚にも刺激を与えてくれる提案や作る技術を持つ田中さんもその中のひとりである。社会参加できる潜在能力（創作意欲やものを作り出す力）の高い人たちがこのような地域にはたくさん存在すると考えられる。「こだま」を照らす灯りの道しるべが地域の人たちの自主的な協力でできることは予想外の出来事として嬉しいことである。（写真14）このプロジェクトに共感してそのような動きが生まれるところに、アートの可能性があるのかもしれない。

10月8日(月)

第5回新通プロジェクトワークショップ

今日がワークショップの最終日である。朝から雨となる。昨日創って、屋外に乾燥させていた「こだま」の室内への撤去に小出さんと勝見さんが朝早くから来てくれる。私は、疲れが取れず、寝過ごしてしまったが、スタッフが率先して動いてくれることに感謝したい。雨のため外での作業ができず、急遽保育園の玄関を開けてもらい作業場とする。新潟大学から2人、中央短大から2人の学生が参加してくれた。寒い中、スタッフの中にはやや疲労がたまり始めてきているようだ。そんななかで新しいスタッフの援助はありがたかった。並行して今まで創った土の状態の「こだま」の石膏付けを行なう。全5回のワークショップを通じて、ここまで全制作数は700体ほどになり、目標数1000体（1メートル置きに1体）に近づきつつある。また、相川さんと田中さんは別の場所で竹灯籠作りに励んでいることにも感謝したい。この作業が、実はあとで地域の人たちが全員集まって手伝ってくれた背景にもなった。

10月9日(火)

西警察署に行き、13日(土)に行なう設置イベントパレードのための道路使用許可書の申請に行く。夕方、雨のため保育園内に乾かしていた土の「こだま」を新潟大学の風間さんと屋外の置き場所に移動する。

10月12日(金)

13日に和太鼓をたたいてもらう田村さんと打ち合わせを行なう。音の響き具合や太鼓の移動のタイミングなど、外に出して音を聴きながらチェックする。また、最後に神社で奉納する演奏を行なうことなどを確認する。（写真15）今回のワークショップでは、和太鼓と笛などの神社で昔から演奏してきた音楽が大変重要な意味を持つと考えてきた。日本人の中に流れてい



写真15 和太鼓練習風景

るリズムであり、今回のテーマである自然界の精霊と呼応すること、また、響く音に触発を受けて大人や子どもと一緒に白い精霊たちが現われ、神社と保育園をつなぐ道づくりに参加する大切な儀式（セレモニー）もある。子どもたちにとって地域の人たち、保護者、保育者たちに守られながら歩き、視覚と聴覚を働かせて参加したことの記憶を持って欲しいという願いもある。また、この日は新潟大学の風間さんが、先日創った土の「こだま」の石膏どぶ付けを時間ぎりぎりまで一人で行なっていた。

10月13日(土)

いよいよ西区でアートの初日でもあり、設置イベント当日を迎える。9時スタッフ全員集合し、「こだま」や竹灯籠を並べる準備をする。出発ぎりぎりまで土の状態の「こだま」に石膏付けを行なう。10時より自治会役員の人たちと、保育士さん、新潟大学の学生と快晴の中、太鼓の響きとともにに出発する。最初、戸惑っていた園児たちも掛け声と太鼓の響きに目を覚まされたかのように行進に加わる。思い思いの場所に自分が創った「こだま」を歩道脇の畑地に刺して固定していく。ほとんどの場所が砂状の畑地なので、子どもの力でも刺していくことができる。（写真16）途中で、太鼓と笛の音に誘われて近所の子どもや園児たちが行進する行列に参加し、一緒に楽しんでくれたことはどこかで予想していたことではあったが、大変嬉しいできごとであった。神明宮の境内までの1キロメートルの道のりの途中で、パレードの最中での車道への飛び出しや、年少児の体力的な問題などが気になったが、大きな事故もなく、多くの園児たちが無事についてきてくれた。普段このような形で、歩道を歩くという経験がないこともあり、心地いい緊張感もあって、騒ぐこともなく、積極的に参加できたのではないだろうか。（写真17）都市化や宅地化が進む中で、昔から住んでいる集落（ほとんどが農家）の人たちと新しく引っ越してきた核家族の人たちと生活習



写真16 「こだま」の設置パレード



写真17 「こだま」の設置風景



写真18 神明宮での奉納の儀式

慣や仕事のちがいを超えた結びつきの拠り所として神社の境内を考えた。今回のプロジェクトでは、その繋ぎの要素を子どもとアートが持つ機能に見出すことをねらいとした。境内では、太鼓を囲んで本殿に「こだま」が無事たどり着いたこと、そして、参加した人たち全員の力を「アスファルトの道」に新たな白い「心の道」を繋いで、奉納の儀式を終えて、参加者全員で勞をねぎらいあつた。(写真18) また、同日の夕方、地域の田中さん、相川さん、細川好円住職、勝見さんなどの協力を得て、竹灯籠の点灯式を行なう。ろうそくの炎にゆれる灯りが延々とアスファルトの歩道を照らす光景は、車の移動では認識できない歩く人のための灯りであった。時々、歩行者たちの口から「すごい」とか「きれい」などという声が暗闇から聞こえていた。(写真19)

10月15日(月)

神明宮の境内において子どもたちの心無いいたずらによって「こだま」が壊されてしまった。近所に住む相川さんによると、いつも境内を通学路にしている小学生たちが面白がってバットで壊していたという。その場で注意をしてもらったが、少し残念な結果であった。原因のひとつに新通小学校に通う小学生一人ひとりに対してきちんとこのプロジェクトの意図を説明できなかつたことが大きいと考えられる。(写真20)

10月21日(日)

午後2時より新通保育園において『地域をつなぐ子どもとアート～「新通プロジェクト—幼児期との対話—」の実践を通して～』というタイトルでトークセッションを行なう。パネリストとして、○ 細川好円護念寺住職 ○ 久我寛神明宮宮司 ○ 横口一則新通自治会会长そして、私の4人で行なつた。また、新潟大学教育人間科学部の佐藤哲夫先生や学生たちも聴きに来てくれた。一方的な話ではなく、聴衆も交えた意見交換を行ない、自由な発言の中から、このプロジェクトの意義、反省点、子どもとアートがどうやって地域をつないでい

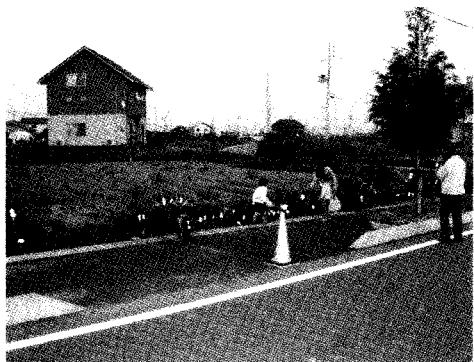


写真19 竹灯籠の点灯式風景

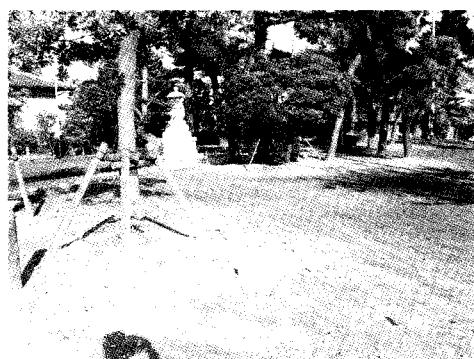


写真20 「神明宮」での設置風景



写真21 新通団地での設置風景

くのか、また、それは可能なのかなどの検証することを参加者全員で考える機会になると
いいのではないだろうか。以下にテープ録音より各発言者のポイントを上げておきたい。

○ 細川好円護念寺住職

地域おこしのためのイベントは地域の匂いのしない公園や檀家で成り立っているお寺
ではなく、地域の鎮守様である神社の境内でやる意義は大きい。昔は農作業しながら大地
と関わってきた。また、純粋無垢な子どもたちがはだしで遊んでいた世界から、靴を履か
せ大地から離してしまい、大地の息吹を足の裏から感じなくなった。今子どもたちは大地
に白い足跡（ピュアーなもの）をつけてどこに行こうとしているのか。

○ 久我寛神明宮宮司

社会の軸、経済の軸（俗あるいは日常の世界）に対して、聖なる軸（不思議なことを感
じることや畏怖の気持ちを持つ世界など）が人間には必要である。日常生活における「は
れ」と「け」のメリハリがなくなった（農業はつらい仕事で日々の生活のおり（疲れ）が
溜まることに対してお盆や神社でのお祭りで遊んだり、報恩講などを聴いて、清らかにな
ってまたつらい仕事に向かっていくという生活の知恵が昔はあった）結果、地域のつなが
りや助け合う力が弱くなり、モラルや倫理観などの教育力の低下につながる。

○ 横口一則新通自治会会长

昔の新通地区は純農村で農業だけで生計を立てていた。当時は神社を中心としたお祭り
があり、子どもが主体だった。大人も子どもも横のつながりがあり、社会の一員としてみ
んなが地域を守り、育ててきた。その根底に安心できる親子関係があった。今回のプロジ
ェクトに関して「こだま」の設置する場所にかかる畠地の所有者の人たちに回覧板を回し
て、理解と協力をお願いした。農家の人は百姓と呼ばれ、何でも自分たちで作ってきた。
だから、ものづくりの力は持っている。当時の子どもたちは土にいつも触っていた。親し
み方が今の子どもとは違う分、創る以前に慣れさせるところからやらなければいけないか
ら大変だ。

○ 風間さん（新潟大学学生）

広報活動をもっと広域にたくさんやらなければいけなかった。一番よかったことは相川
さん、田中さんをはじめ地域の方々の協力が予想以上に多く得られたことであり、竹灯籠
を皆さん気が入ってくれ、それをきっかけにたくさんの人々に参加してもらったことであ
る。

○ 小出さん（新潟大学学生）

地域の人たちに対する働きかけが足りなかったと思う。ワークショップでは保護者が一
生懸命参加することで子どもが安心して参加できることが実感できた。親子関係がアート
でつながり、親子から地域に広がっていけたらいいのではないだろうか

○ 勝見さん（内野町のボランティアスタッフ）

土を捏ねることは純粋に面白く、大人が楽しめた。うまい・下手は関係なく自分が思うとおりに創ることができることが魅力的である。

○ 細川玲子新通保育園副園長

参加した子どもから「もうあれはいいよ。」という言葉がでてきた。その理由として、周りの人が楽しんで一緒に根気よく付き合っていないことが原因として挙げられた。子どもにとっては知らない大人だからすぐに何かを創ってといわれれば警戒をする。また、先生や学生の「型にはまつたもの」を創られ、やらされているという雰囲気もあった。大切なことは自己解放とコミュニケーションと出会いである。また、何を創っていいかわからないからいいや。というかたちの不参加もあった。今回が初めてのプロジェクトなのでたくさん失敗することに意義がある。このようなアートプロジェクトは今後も継続したい。

○ 佐藤哲夫新潟大学教育人間科学部（現・教育学部）教授

今回の制作について、子どもの「飽きる」という発言の原因について、誰にでもすぐにできるからその創作行為自体に発展性がないと感じることが原因ではないのか。そして、その対策として次の目標を伝えながら創るように指導するなどの方法が考えられるのではないか。また、今年で4回目となるうちのDEアートから西区DEアートになり、作品が拡散気味になっているが、関わっている地域の人たちは全体としては協力的な体制と意識が育ってきている。

などの意見が参加者の方々から聞かれた。

当日の私の発言した内容は全体の制作過程の記録の中で述べていることと重複するので割愛する。そして、最後に新通地域では2008年度も継続したいという結論が出た。細川玲子先生から、「今年は失敗することに意義がある。子どもとどうしたらもっと楽しむことができるか。

それを一緒になって探し当てる目標としてやっていきたい。子どもの活動を核として大人が輪になり自然をつなぎ、環境を守り、新しく入ってきた人たちと昔から住んでいる人たちと仲良く協力し合い、地域がそれらを育てるという気持ちで実行していくことが大切なことである。地域の特色である農業をアートとつなげて、もっと農家の人たちの底力を取り入れて、例えば素材として、紙や藁なども考えられるのではないか」という貴重な意見も出た。（写真22）

2時間を越えるトークセッションとなったが、私にとって、様々な分野からの貴重な意見を聞くことができて意義深いものであった。最近、自己完結型の作品より、人と人との関わりを取り込んだ作品づくりが多くなっている。それは、私自身の興味の持ち方の変化によるものである。「現代社会における人間関係の再構築」というテーマが気になってい

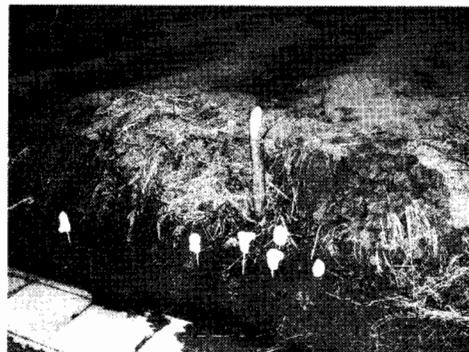


写真22 竹灯籠と「こだま」の設置風景

ることが原因でもある。作品の完成に重きを置くよりも会期中のこのような話し合いも含めたそのプロセス自体がアートを成立させる上で大切な要素であり、最後までどのように関わったのか、また、周りの人々を含めたその関わり方の質が、実はアートの質に大きく関係しているのではないかと考えている。

10月28日（日）

西区D E アートの最終日となる。午後3時より田中さん、相川さん、勝見さんたちと新通保育園側から撤去作業に入る。途中から新通地域の役員の人たちも加わり、4時に神明宮境内において撤去作業は終了した。午前中から用意した鍋を囲み、境内において打ち上げパーティーにそのまま移行する。久我宮司さんが2週間という短い期間ではあったが、昔から住んでいる人たちと新しく移ってきた人たちの間でひとつにまとまらないもどかしさを感じている状況の中で、この試みをその二つの壁を越えた「心の道」ができたと評価してくれた。役員の人たちから「寂しくなったね。」という言葉が聞こえてきた。私にとって、神社の境内で車座になって鍋を突くという経験は初めてではあったが、安心感、安堵感、そして、地域の人たちから初めて近しい存在として認めてもらえたような一体感があった。

12月20日（木）

新潟大学のスタッフである風間さんと小出さんからメールでの反省点が挙げられているのでそれを最後に紹介したい。

○ 小出さん

ワークショップの時、子どもたちの要望から好きな形を創ることに繋がったことはよかったです、私の考え（プロジェクトのねらい）がどれだけ伝わっていたのか気になった。企画として自由の中にも線引きが必要だったのではないか。また、自然の風雨にさらされて、破損するものが目立ち、石膏のコーティングのみでは厳しかったのではないか。素材研究で1ヶ月くらい放置しておくべきだったと思う。また、広報の難しさと大変さを感じた。

○ 風間さん

相川さんや田中さんなど、地域の方々の協力が予想以上に多く得られ、たくさんの方々と交流を持つ貴重な機会を持つことができてよかったです。また、石膏のみでは強度が不十分ではなかったか。破損しているものがたくさんあり、悲惨な感じがした。「こだま」・土・白という風にイメージを固定していたが、その形を完成形として子どもを誘導するのみで終わっていた。ただ教えるだけでなく、なぜこの形に繋がっていくのか、その根底にあるものをこのプロジェクトに関わるすべての人々にしっかりと説明し、共有できなければいけなかつたのではないか。

まとめ

本論では、制作過程の記録を基に、その様々な試みの途中に考察を加えるという流れを作ってきた。ここでは、5つのポイントから整理したいと思う。

1. 土という素材の選定について（場所の固有性）(p 5・6・7参照)
2. アニミズムというテーマ設定について（p 7・8参照）
3. 一本の道（並べることの意味）について（p 9・10参照）
4. 地域とのつながりについて（p 11・12・13・14・15・16・17参照）
5. 子どもとアートについて（p 10・11・15・16参照）

などの観点から本論を記録に基づきながら考察していったが、最後に紹介した反省に対して私の見解を記したい。最初に石膏の強度の問題であるが、厚くコーティングをして、1ヶ月以上放置実験を行なっていたにもかかわらず、私の指示不足もあり石膏をうすく溶いてコーティングしてしまったものがたくさんあった。濃く溶いてコーティングした場合、細かな表情が消えてしまうことへの不安があったため、指示の徹底がなされなかつたという反省があげられる。また、子どもたちの制作に対する誘導やねらいをどうやって伝えればいいのかという言葉の準備不足が上げられる。それは、ある意味で無謀な「自然界の精霊たちを立体で表現する」というテーマであるがゆえに、抽象的な言葉となり、この形を作ろうという安心感を伴う限定的な言葉の限界を超えていた内容だからでもある。今回のねらいとして、あえて、一斉授業という形式はとらず園庭で作業をやっている風景の中に、自然と子どもたちが参加できる雰囲気を作り、好奇心に任せて好きな形を作り出すという性格を大切にしたかったからである。実践して気づいたことは、その時の共通語がなかったことで、担当者個人の判断や価値観で声を掛けていたことである。それでもこちらの創っているものを見て固定的な概念を感じとり、やめてしまう場面や逆に面白がって次から次に創り続ける子どももいた。はっきりと二極に分かれたが、創り続ける子ども達の内面をもっと観察したいと思った。創り続ける子供たちとは、結果として対話することにより、その子どもの内面の変化を知ることになる。大切なことはその子と1対1で、どのように言葉を交わして、心を開放してあげられたかどうかにかかるくる。（写真23）

創り続ける時には、そこに驚き、不思議あるいは、認められたという安心感や信頼感などの強い感情によって触発される必要がある。今回のプロジェクトでは、その安心感より



写真23 対話を重ねたワークショップ風景

も、多くの子どもは何を創っていいのか分からぬといった不安感のほうを感じながら創るという状況だったと思われる。また、泥んこを体に塗りつけ気持ちよさそうにしている園児は、まさに土あるいは大地の精霊と一体化している姿なのかもしれない。「それは、日本民族の生き方そのものだった。「米づくり」を離れてしまっていても、日本人の生き方の根底にはこの、「べとに触ってねばの、生きてても命半分だ」というためいきが隠されているのではないか。それに、「べと」という言葉には、たんなる土ではなく、田の中の土、つまりべとつく泥のやわらかさ、温かさ、そしてコメのみならず一切の生命を育んでくれる泥への愛しい思いがひそんでいる。こういった泥の感覚を、現代の日本人は「米づくり」から離れることによって、忘れつつある。」⁷⁾この泥の感覚に触ることは造形活動以前の我々の生命を養ってきた記憶の部分を呼び覚ますことであり、そこにこそ大人も子どもも嬉々として参加できる活動に繋がる可能性があるのでないだろうか。今回のワークショップを通じて最も印象に残った光景は、園児が一心に泥んこで遊んでいた場面である。象徴的な出来事でもあり、この感覚こそ自分が自分の体や内臓感覚⁸⁾に気づくことであり、概念で創るという行為から最も遠いところにある瞬間でもある。

「「考えること」に関して、われわれはあまりにも言語を頼りにし、中心にし過ぎてきた。言語的回路を通さず、図示によって手先から立ち現われる思考があり、もう一度それを目へ送り返して次の思考を喚起するという当たり前の営みを、案外忘れてしまっていたのだ。」⁹⁾とあるように、アートの手法は、創りながら考えることの繰り返しといってよい。したがって完成予想図はなんなくあるにしても、そこに到達することが目的ではなく、途中の様々な出会いや話し合うことを通して、行為が変わることや結果としてうまくいかなかつたことも含めて、手先から立ち現われる思考を続けることで初めて人の心に何かを届けられる結果に結びつくのではないだろうか。この行為の中でどれだけたくさんの人たちと対話ができたのか、そして、その反映が形として表わされているのかがそのアートの質を決定するのである。しかし、本論ではそこまでを書ききることはできなかった。その一部を紹介することをまとめとしたい。

おわりに

本研究は、準備期間を入れて、5ヶ月の時間を要して実現できたものである。その制作過程の中で紹介したように、新通保育園の園長、副園長先生そして保育士の方がたのご尽力の下、新通自治会の横口会長をはじめとした役員の方がた、神明宮の久我宮司さん、声を掛けいただいた新潟大学教育人間科学部（現・教育学部）芸術環境講座美術科の丹治先生、佐藤先生およびスタッフとして時間に隙をつけて働いてくれた小出さん、風間さん、そして学生有志の方がた、新通保育園理事の相川さん、内野の勝見さん、高山の田中さん、太鼓を叩いてくれた田村さん、そして新潟中央短期大学の学生諸子の多大なる協力の下に

おいて、初めて完成できたアートプロジェクトである。もちろんこの制作ワークショップに参加をしてくれた新通地区の園児及び保護者の方がたも含めて深い感謝の意を表わすものである。

註および参考文献

- 1) 宮崎駿原作・脚本・監督、『もののけ姫』、徳間書店、日本テレビ放送網・電通・スタジオジブリ提携作品、1997
- 2) 有馬朗人著者代表、『土 東京大学公開講座51』、東京大学出版会、1992、p 7
- 3) 岩田慶治著作集三、『不思議の場所新しいフォークロアの方向』、講談社、1995、p 409
- 4) 岩田慶治著作集七、『生命のかたち見えるもの・見えないもの』、講談社、1995、p 17
- 5) 建部健一、『道1 ものと人間の文化史』、法政大学出版局、2003 p 21
- 6) 竹内芳郎、『文化の理論のために』、岩波書店、1981、p 29
- 7) 松本健一、『泥の文明』、新潮選書、2006、p 10
- 8) 三木成夫、『海・呼吸・古代形象』、うぶすな書院、1992
- 9) 中村英樹、『表現のあとから自己はつくられる』、美術出版社、1988、p 34